アミノバイタルカップ	
1回戦	vs作新大 ○4-1
2回戦	vs日体大 ○0-0 (PK 5-4)
3回戦	vs筑波大 ●0-2
順位決定戦	vs流経大 ●1-2
7・8位決定戦	vs明大 ●0-1

全国への道、西が丘に散る…

“あとひとつ”が遠かった

層が厚くなったチーム

7/1～8 日の 8 日間の間に5試合が行われた「アミノバイタル」カップ2017。今年も過密日程の中、駒大イレブンは熱戦を繰り広げた。今大会を語る上で欠かせないのは、リーグ戦では出場機会に恵まれなかった選手たちの台頭である。

新戦力の台頭が顕著に現れたのは1回戦の作新大戦。スタメンには薬真寺孝弥、米田大介、矢崎一輝の1年生トリオらフレッシュな面々が先発出場。薬真寺が大学初ゴールを挙げるなど、それぞれが存在感を見せた。さらに、リーグ戦ではノーゴールに終わった小田駿介が 2 ゴールを奪う。終わってみれば4ゴールを挙げて完勝。過密日程の中で選手層の厚さを見せた。

大会序盤は、チームの主軸である高橋潤哉、星キョーワァンを選抜の海外遠征で欠いた。ここで台頭したのが、怪我からの復帰を果たした室町仁紀と副将の眞砂慶太郎。室町は豊富な運動量とポストプレーが持ち味。眞砂は全試合に出場し、瞬く間にディフェンスリーダーとして君臨した。

日々行われる熱戦の数々

1回戦こそ下位リーグのチームとの対戦だったが、その後は1部のチームと激戦を繰り広げた。

2 回戦は日体大との対戦。リーグ戦では5-3と撃ち合いを演じているだけに、互いに守備を固める展開。試合は延長戦、さらには PK 戦にもつれることとなったが、ここで圧倒的な輝きを放ったのは守護神の輪島稜。相手の決定機を何度も防ぐと、運命の PK 戦では相手の 5 本目をキャッチし、駒大の劇的勝利、そして今季初の無失点勝利を掴みとった。

しかし、ここからは苦しい戦いが続く。総理大臣杯本戦の出場権まであと 1 勝に迫ったところで立ちはだかったのは現在リーグ戦で首位の筑波大。海外遠征から帰還した高橋、星キョーワァンが共に先発起用されたが、一瞬の隙を突かれて2失点を喫し、敗戦となった。ここから順位決定戦に回ることに。初戦の流経大戦は疲労を考慮してターンオーバーを実施。相手の猛攻に粘る展開が続くと、後半 AT に痛恨の失点。いよいよ総理大臣杯に向けてあとがない状況になった。

夢をかけた最終決戦

総理大臣杯出場。それは選手たちが日頃から目指してきた「全国」の舞台。夢をかけた最終決戦は昨季の総理大臣杯王者・明大との一騎打ち。獅子吼と紫紺の戦士たちが最後の切符をかけた戦いに挑んだ。

試合は序盤から獅子たちが決定機を演出。両ワイドの大村英哉、中原輝が果敢にゴールに迫るが、あと一歩のところで決め手を欠いてしまう。それに対して明大はしっかりと枠内に狙いを定めてくるも、ここで輪島が好セーブを連発。獅子吼の護り神が立ちはだかる。

拮抗した試合が動いたのは 76 分。駒大を悪夢が襲う。カウンターから相手に抜け出され、痛恨の失点を喫してしまう。何としても巻き返したい駒大は薬真寺、小口大司、安藤翼と前線のカードを立て続けに切ったが、最後まで1点が遠かった。

試合終了の笛が鳴り、全国への夢は西が丘に散った。試合後秋田監督は「この悔しさを糧に、監督・コーチも含めて変わっていきたい」と逆襲を誓った。　（宮下　響）